

『有明海とアオ(淡水)の世界』 佐賀

「水の文化とは」と問われるとき、まず心に浮かぶのが、アオ(淡水)の文化です。アオとは、上げ潮に乗って海からやってくる川の水のことですが、そんな水を使って、太古の昔から最近まで、独特の世界を築き上げてきたのが有明海沿岸の人たちなのでした。

先ず、アオの説明をしましょう。

有明海は干満差の大きい海であり、六角川河口などではその差が六メートルにも達しています。筑後川を初めいくつもの川から吐き出された水は、干潮時、海水に載ってはるか沖合に運ばれ、そして満潮になると比重の重い海水の上に載ったまま、また陸地に押し戻されます。その、高い水位でやってくる淡水を取水して利用してきたのが、有明海沿岸の農民たちでした。

有明海沿岸は日本を代表する大干拓地帯であり、そこはまた、クリーク地帯でもありません。そのクリークは、アオを貯めて置く溜池

でもあったのです。

私がこのアオのことを知ったのはあの有名な福岡の大湧水、いわゆる五三年湧水の頃でした。水のことなど考えもせず、自己の貴重な水源であるはずの森林や溜池、水田を平気でつぶし、ただひたすら人を呼び込んで百万都市を造り上げてきた福岡市。金に任せてダムを造り、五つ作り、六つ作り、百万都市の水はこれでもう大丈夫という、その六つ目のダムが完成したとたん、六つともダムが空になってしまった五三年湧水。

この湧水の時私は、テレビの朝の番組などに呼ばれては、しばしば福岡との間を往復したものでした。

けれど、連日の断減水に悩む市民の皆さんから寄せられるのは、もっぱらお隣を流れる川、筑後川の水をくれ、あの川には上流のダムにも川にも、下流のクリークにも水があるではないか、との声でした。自己の水を死守

しようとする筑後川流域の人たちにとって、それはあまりにむごいことでした。対立する

大都市と、農民、漁民とのその姿を見るにつけ、私はものを知らないといふことの悲しき、怖さを考えさせられたものでした。水というものは本来は、自己の水系、自己の水源の中で対処すべきものであり、そして筑後川の水はみな、農民たちが命がけて作ってきた水でした。そしてまたクリークは、そこが水の乏しい地方であることの象徴でもあったのです。

翌年私は文藝春秋に『水の文化史』(注1)を連載することになり、アオについて思い入れを込めて書きました。更に『日本再発見の旅』(注2)にも別の形で紹介しましたが、ついに『日本の米』(注3)の冒頭に、このアオを再々度登場させたのです。「吉野ヶ里はなぜ滅びたか」という謎解きの形で。吉野ヶ里はアオによって栄え、アオによって滅びたのではなかったか。(むろん当時の環境の



初春の城原川

(1) 富山和子『水の文化史』
文藝春秋 1980年

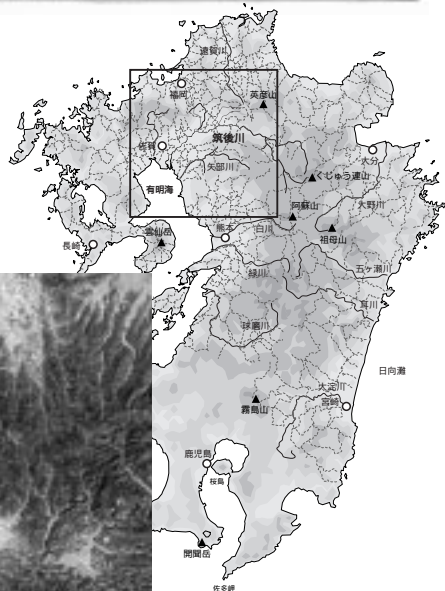
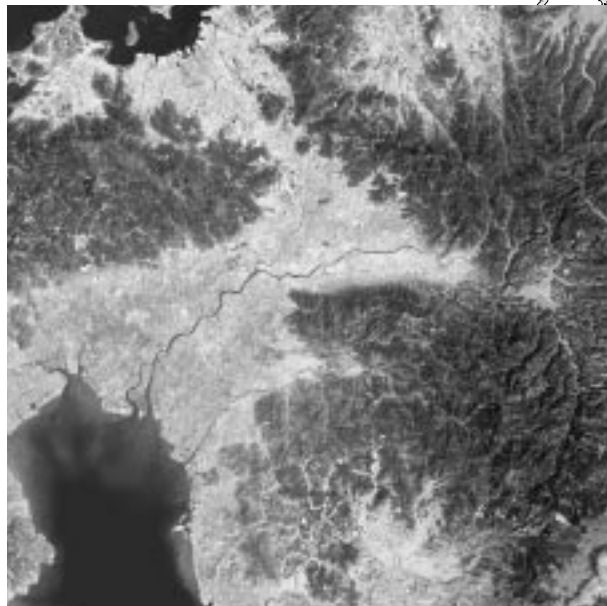
(2) 富山和子『日本再発見 水の旅』
文藝春秋 1987年

(3) 富山和子『日本の米』
中公新書 1993年



かつての城原川と環濠集落
(神崎郡千代田町付近)
写真提供：宮地米蔵氏

有明海と筑後川流域
(ランドサット衛星写真1994年6月撮影)
九州北部は南にくらべ山が浅く、平野が広い。



変化と少しずつ、べつの要因も考えられるにせよ、
です。
恐らく歴史の初期の時代には、アオは中国
はもとよりベンガル湾などアジア諸地域の海
岸の低湿地でも、いえアジア以外でも使われ
ていたことでしょう。そのアオが、日本では
稲作の初期、古代吉野ヶ里王国を育て、その
盛衰の歴史を背負い、以来連続と筑後平野を
養いつづけ、そして現代に至ればあの佐賀段

階という、やはり歴史的な佐賀平野の栄光の
一時期を築き上げるのです。
ローマンに満ちたそのアオの文化が、いま絶
えようとしています。一九九八(平成一〇)
年、筑後川下流用水事業が完成し、それまで
不安定なアオ取水に頼っていた農業用水は、
ダムの水を使うことに切り替えられたからで
す。この時点で、稲とともに二千数百年続け
られてきた日本のアオの歴史は、ヒリオドを

打つことになったのです。
とはいえ、まだわずかにアオの伝統を受け
継いでいる人たちはいます。その人たちが健
在の間に、何とかその知恵や技術を記録に残
したい。そんな思いで、地元農民たちと深く
つきあつてこられた行政法学者で特異な水問
題の研究者、宮地米蔵さんに、お話しいた
くことに致しました。

この対談は、一九九八(平成一〇)年二月に行われたものです。

富山 五年前、佐賀テレビの「クリーク幻影」という長時間番組の出演で、ロケのためしばらく現場を歩いたことがありました。そこで知らされたのですが、佐賀市民の中にも、アオのことをご存知ない方が増えてきました。クリークは、ふたをされたり統合されたりして、以前とはすっかり姿を変えたものの、まだ掘り割りとしてある程度残ってはいるのですが。

それに、これは全国的にいえることですが、農業用水までが蛇口の水になり、農民の生活にも昔のような、「水を死守する」といった緊張感が薄れつつあります。そんなところに筑後川下流用水が建設され、アオから普通の川水への転換となったのです。歴史的な一大転換でしょう。

とはいえ、佐賀平野は広い。アオ取水の樋門だけでも無数にありました。で、いったいアオ取水は現在、どうなっているのでしょうか。

昔は桶で汲み上げた

宮地 アオが下流から上つてきますが、川全体の水量が少なくなっていますから、アオの水質がだんだん悪くなっておりまます。一九五三（昭和二八）年の大水害（注4）のあと、災害を防ぐ名目で、上流域に下笠（しもうけ）・松原ダム（注5）が、一九八四（昭和五九）年には下流域に筑後大堰が完成しまして、本流の流れ自体が少し変わってしまいました

た。それで一番最初にその影響を受けたのが筏流しです。筑後川の上流というのは日田市とか小国町とか杉の美林がある所で、それを筏に組んで流していたわけです。下流域のほうは特殊なクリーク地帯ですが、そのクリークの水位が田圃より低いです。だから人間の力で、クリークの水を水田に流さなくてはいけないんですが、昔は大きな桶にヒモをつけてまして、田の窪地に二人向かい合って、桶で水をくみ上げていたんです。それがやがて、足踏み水車になるわけです。足踏み水車には日田杉を使うわけです。大川（注6）は今は木工家具で有名ですが、もともと大川の木工技術というのは足踏み水車の製造が始まりでした。この足踏み水車を万右衛門車といいます。上流にダムができて、筏流しが出来なくなり、それでも筑後川でアオを取っております。けれど、そういう所の水質が、だんだん塩分も濃くなってまいりまして、ずっと下流佐賀でいいますと、犬井道・南川副の漁港がありますね。あのあたりでアオを取っております。取れなくなりました。その次には、筑後川河口部に大中島がありますけれども、これがいわゆる福岡県側では大野島、佐賀県では大詫間島（おおたくましま）といいますが、ここでも筑後川から取水する。けれど筑後川下流域は、大体は有明海の入り江と考えるといいわけで、低い所を流れておりまますから、大変な人間の労力をかけないと、低い所から高い所へ水を運ぶことはできないわけです。幸いにして、有明海は六メートルの

干満の差があるので、満潮の時に水を取れば、ずっとクリークへ流れて行く。「海の水で塩水でしよう」と皆さんお尋ねになるわけですが、うまくできてはいるわけで、水って不思議なもので比重の関係で重いものが下の方に沈みますから、上の方は上流から流れてきた淡水なんです。それを淡水と書いてアオと言っているわけです。

養水と用水

富山 アオは、東京湾沿岸でも昭和の初めまでは一時取っていましたし、木曾川水系でも最近まで取っていましたね。

宮地 木曾三川（木曾川、長良川、揖斐川）それから岡山、同じ九州では熊本の上流でも取っていました。

富山 やはりどんどん減ってきていますね。

宮地 だんだんとね。水質が悪くなってきましたからね。

富山 これだけの干満差だから、特にここは取りやすかったのでしょうかね。

宮地 そういうことです。だんだん下流の方から条件が悪くなってきましたから。それでもね、上流からすこし余計に流してくれれば

(4) この年六月二十五日の豪雨で、佐賀市では一時間に七・三三ミリの降水を記録し、翌二六日昼までには四百ミリの大雨となりました。被害は全県下に及び、死者五九名、行方不明八名、負傷者三三六名、被害総額は二四九億円で、これは当時の県民総所得の六割に当たる。これにより、筑後川流域と佐賀地方平野部は一面の泥海と化した。

(5) 筑後川の上流（大分県）に位置するダム。下笠ダムは一九七三（昭和四八）年に完成。

(6) 福岡県大川市。筑後川河口に位置し、有数の家具生産地として知られる。

アオ灌漑

アオは、「淡水」と書く。満潮時、海水に乗って逆流してくる川の水をいう。

有明海は干満の差が日本一大きく、筑後川河口で5メートル、六角川河口で6.5メートルに達している。干潮時、川から吐き出された淡水は、はるか沖合いに運ばれて、やがて満潮時、比重の大きい海水の上に乗る、高い水位で陸地へ向かって押し戻されてくる。その淡水を利用して米作りをつづけてきたのが、水に恵まれない筑後川下流平野の、クリーク地帯であった。

いいかえれば、川が吐き出した水を、海が陸地にお返ししてくれる。それを汲み上げて、大地に返していたのである。

とはいえアオ取水は月二回の大潮に限られる。水は貯めておかねばならない。網の目状に走るクリークは、一つには、低平の農地に土を盛り上げるため掘った跡であったが、一つにはアオを貯わえておく溜池でもあった。

満潮時、海からアオがやってくると、人々はクリークの樋門を開ける。するとアオは怒濤のごとくなだれ込む。人々は夜を徹して水を守り、水の色、泡立ち具合や味を見て、海水が混じりそうになると樋門を閉める。そのため、大小の樋門が至るところに作られていて、それが独特の景観であった。立派な石積みの樋門もあれば、板一枚の簡単な板堰もあった。

筑後大堰ができたいま、農業用水はゆくゆくは、ダムの水に切りかえられる方向にある。が、少なくともいまのところ、アオ取水はつづけられているのであり、この一帯を歩くと、時折り古い樋門に出会う。そのたびに私は、日本人と水とのつきあいの深さを思う。

アオは、わずかではあるが木曾川でも最近まで使われていたし、また関東では中川筋の埼玉県南埼玉郡潮止村(現八潮市)で、昭和2年まで、「日照りのとき、上げ潮の水を水車で引き上げて利用していた」という記録がある。

(富山和子『日本の米』中公新書より)



クリーク密度図
堰(クリーク)を中心とした筑後川下流。(原図：深川 保)

筑後川下流用水事業とアオ取水の現状

筑後川下流地域に広がる広大な水田地帯は、水に恵まれない地域でもあった。そこで用水の安定確保を目的に、1976(昭和51)年に始まった農林水産省による「筑後川下流土地改良事業」の中から、筑後川からの取水施設、導水路等の基幹となる施設の工事を1981(昭和56)年に承継して実施されたのが、水資源開発公団による「筑後川下流用水事業」である。筑後大堰(1984・昭和59年完工)上流部の両岸に設けられた取水口より一括して取水し、用水路で佐賀・福岡両県の8市24町1村の田畑に水を送ろうという事業である。これにより真水を安定して取水す

ることが可能になったといわれている。

一方、この事業により、アオ取水も、新たな用水路よりの取水に切り替わることになった。従来より農業用水として利用されてきたアオ取水のための施設が192箇所あり、それらを統合し合口取水することになったためである。1996(平成8)年より試験通水が、本年4月1日より本通水が始まり、これにより事実上アオ取水はなくなった。ただ、アオ取水に関連した既得水利権から新用水への水利権への切替に、同意していない地区も若干残っている。

< 1999(平成11)年7月末現在 >



宮地 米蔵氏

1919(大正8)年、佐賀県に生まれる。
九州帝国大学法文学部卒業。
福岡大学法学部教授を経て、久留米大学教授、同
客員教授。1996(平成8)年、同大学退職。
主な著書に『水漬く山里』『貧乏県物語』『佐賀平
野の水利慣行』『筑後川農業水利誌』『佐賀平野の
水と土』『水の博物誌』『日本国行政法講義』、その
他著書論文多数。
研究の基礎は、フランス革命以来の課題である
「自由と平等」及び「共同体」community(コミュ
ニティ)においている。

「水の会」の主宰者。絶えず川を歩いている。

ば、取れるのではないかとということ、実は
一九七八(昭和五三)年の渇水の時に、下流
の、特に大中島のアオ取水のために、下笠・
松原ダムの水を放流してくれとずいぶん細か
い打ち合せをしましてね。その時はうまくい
ったんです。

肝心な灌漑期に必要な流量が流れてくれな
いと困るわけです。このあいだ蛤水道(注7)
でお会いしましたね。平六湯水(注8)の後で
したな。あそこで東背振の村長が言っ
たな。「今年は、山一帯が自分の貯えている
水をすっかり減らしたんじゃないでしょ
うか。いつもと違って、全然流れに勢いがあ
りません」と。だからあの時本当に、さすが
の蛤水道でも水量が減っていましたね。水資
源は微妙なもので、あるからといって勝手に
使うのではなく、自然に流すべきものはち
んと流すというように、使い方をもうちょっ
と上手にしないと。たとえば戦後、ダムを一

生懸命造っていた時期には、「川が一定の働
きをするのに、維持流量というのがなければ
ならない」などという、そんな考えなかつた
でしょう。

結局、流域全体として川をどう使うのか、
上流、中流、下流それぞれの農民なり漁民な
り市民の暮らし、それをトータルとしてバラ
スをとった形での、水の使い方を考えなくて
はいけない。かつて、江戸時代までは用水と
いうのは、養つ水と書いておりましたな。つ
まり、田畑や人畜を養つ水。全体として水を
とらえていたんですな。

富山 そうそう。ところが現在は、更に狭め
られてしまった。農業用水ならば、農民の生
活のための水すべてが含まれる。事実、用水
は野菜や農具を洗つ水であり、洗濯の水であ
り、村の防火用水であり、船を浮かべる水で
あり、子供の遊ぶ水であり、魚を養つ水であ

り、実に多目的に使われてきたはずでした。
それがいつの間にか「灌漑」用水と、意味を
狭められてしまった。そんな風なことさらに
狭く限定させ、灌漑の用途以外には価値を認
めず、余分な水は皆集めて都市にまわせ、と
いう方向で水の整理統合が進められた。用水
が地下にしみこみ水を養つことも、周囲の空
気を潤すことも、よけいなこと。それは浪費
で、「漏水」なのだから、すべからずコンク
リートにして水を一滴でも無駄にするな、都
市へまわせ、という思想です。日本の農業が
ここまで追いつめられてきた陰には、そうし
た厳しい都市化社会の風土がありました。

宮地 だから日本人の水との付き合い方とい
うのは、われわれの暮らしのリズムと自然の状
態にある水と必ずしも噛み合わないわけ
です。

ところで、われわれがある催事を行います
ね。そうしたら主催者は、「幸いにしてお天
気に恵まれましたけど」と言ったり、「あい
にくの雨ですけれど」と言ったりしますね。
もしその時、日照り続きのお百姓さんだつた
らどう言うでしょうか。「本当に恵みの水だ
って言うでしょう。片方はあいにくというの
に。それくらい人間というのは、人のことは
わからない。自分の暮らしを中心に考えている
わけ。水を考える時に、ある地域の人にとつ
てもしくは、ある職業の人にとつてもしくは
ある都市にとつては、と考えていくと、今
みたいに「用水」という「誰かが用いる

(7) 元和年間(一六一五―一四)成富
兵庫茂安によって東背振村に建
設された用水路。明治以後改修
が行われ、現在ではコンクリー
トの用水路となっている。

(8) 一九九四(平成六)年の記録的な
渇水。特に、瀬戸内地方や北九
州地方では長期間の取水制限が
相次いだ。

水」という特定の概念が生まれて、角突き合
わせることになるのではないですか。

クリークとのつきあい方

に見る農村の知恵

富山 筑後川といえば私は、五三年渇水の強
烈な印象が忘れられないのです(注9)。筑後
川の水を貰いたいと、福岡市民は声をあげる。
が、水を分け与えるということはそんな簡単
なことではないのですねえ。まして、筑後川
も大渇水です。ところが市民からの声は、ダ
ム、それも発電ダムに水がたまっているのは
けしからぬ、いや、川に水が流れていること
さえけしからぬ、といったくあいでした。水
というものについても、水とのつきあいの歴
史についても、知らない。アオのことも知ら
ない。都市と農村とのこの断絶がいかに深刻
なものか、考えさせられました。

宮地 やっぱり都会では、動物にしても人間
にしても、本当に暮らしを通じて、「お互い
が生きものだ」という形でつきあっている
ですね。渇水の場合に、「取水制限をするこ
したらどちからかはじめるか」と、今でもそ
ういう議論になるんです。そうすると都市用
水、これは生活用水だ。だから一番最後だと
いう。まず槍玉に上がるのは工業用水で。と
ころが考えてみたら、工業用水にしてもそれ

が止まったら工業生産できなくて、それで食
べている人の暮らしがどうなるかというこ
ろ。例えば、日照りが続きますね。昔からそ
ういう日照りが続いた時には、ちょっと辛抱
して、水は「あなたの所はこの次に回します
から」という水のローテーションを組んでま
すね。日割りだとか時割りだとか。ところが、
それが分かっていてもつい日割り、時割りを
無視して水を盗む人が出てくる。そういう時
には、お互い相手の事情が分かっているから
その地区の長老たちがじっくり事情を聞いて
ね。そうしたらこう言うんですね。「何しろ
目の前で自分の田んぼが泣いている」と。本
当に生き物を育てているという感覚が出てく
るわけなんです。ところが、田んぼが泣いて
いるからどんな水でもいいかというところ、一九
九四(平成六)年の渇水の時には、筑後川に
潮が満ちてきますね。それでそこからアオを
引こうとする。けれど、それは塩分が濃くて

うっかり入れたら逆に稲が死んでしまつ。そ
ういう時、じっと我慢してお互いにローテー
ションを組んで、上流と下流とがうまくやる。
このへんの農民の本能的なカンがある。

富山 海からの潮と、上流からの水ね。同じ
分け合つにしても潮が入ってきてという、そ
のへんの農民のカンや苦心の類の話はたくさ
んあるでしょうね。

宮地 いっぱいあります。例えば、つい最近
まで代表的なアオの取水樋門といわれていた
新川の寺井水門の水番を代々やっていた人
は、アオの切れ具合で塩分が濃くなったこと
がわかるといいます。それは、目で見て耳で
聞いて、最後は舌で聞くとね。

富山 耳で聞くというのは、どういふこと
ですか。



富山和子氏

立正大学教授・日本福祉大学客員教授

群馬県に生まれる。早稲田大学文学部卒業。
水問題を森林・林業の問題にまで深め、今日の水、
緑ブームの先駆となる。また「水田はダムである」
という重大な指摘を行ったことでも知られる。著書
『水と緑と土』は環境問題のバイブルといわれ、25年
間のロングセラー。自然環境保全審議会委員、中央
森林審議会委員、河川審議会専門委員、海洋開発審
議会委員、瀬戸内海環境保全審議会委員、中央公害
対策審議会委員、林政審議会委員、食料・環境・農
村基本問題調査会委員。環境庁「名水百選」選定委
員など歴任。「富山和子がつくる日本の米カレンダー、
水田は文化と環境を守る」を主宰。
主な著書に『水と緑と土』(中公新書)『水の文化史』
(文藝春秋)『日本の米』(中公新書)『川は生きて
いる』(講談社、第26回産経児童出版文化賞)『お米
は生きています』(講談社、第43回産経児童出版文化賞
大賞)『水と緑の国、日本』(講談社)などがある。

<近況> 21世紀、地球を養うには、麦ではなく
「米」しかないことは世界の常識となっています。そ
こで、世界の稲作文化国が連合組織を作り、稲作文
化の評価・研究・啓蒙活動に努めようと、各国で準
備が進められています(Japan-Asia Rice Foundation:
日本アジア米基金 仮称)。去る9月、バンコクで会
議が行われましたが、日本からは富山和子氏が代表
として出席しました。

(9) 富山和子『水の文化史』で詳述

宮地 アオの切れ具合でね。「異色のこだわ
り派ディレクター」として知られる片島紀男
君(注10)が若いとき、私のそついつ話を聞いて
ね。樋門を開ける時にその音を録音して歩
いたんです。一番潮の高いのは、八朔潮(注11)は
つさくしお(注12)の時、九月ぐらいですよ。
その時のアオをのつけて潮が上ってくる音と
いっつのは、爽やかですな。

富山 アオをのせて潮が上ってくる音といっ
つのは、月によってかなり違つのでしょか。

宮地 やっぱり川によって違つ気がする。昨
夜食事した時、給仕してくれた仲居さんの一
人が、「新田大橋」の上から聞く潮の上って
くる音はすばらしい」と言っていましたね。
でもね、新田大橋は筑後川本川最下流の橋で
すが、本川から小さな筑後川の支川に入つて
きますと、もっと素晴らしい音がしますよ。
武雄のほつ六角川では鳴瀬という所があり
ますが、あの鳴瀬というのは、潮が上るとき
の音から鳴瀬といっつらしい。

ところで、農民は灌漑時期になって水を使
う時には、農民の川の使い方します。自分
たちが水を使わない時には、川はできるだけ
自由に流れるようにするといつものです。つ
まり用水堰はね、使わない時(非灌漑期)に
は解放しておくんです。解放している用水堰
を堰きあげる。これを、所によって言葉は違
いますけど、「こいらでは「井手揚げ」とい
う行事になる。井手(イデ)といつのは堰の

こと。井手を堰きあげるところから、お百姓
さんの一年の水の行事は始まる。その前に、
井手は自分たちの村々に引いている水路がな
ければいけないわけ。一番下流の村から水路
をすうつと浚(さら)えていくんです。で、
例えばこれが八千口あるとすれば、一番下流
の村が一番負担が大きい。途中の村を通過つて
その堰の所まで水路を浚え掃除していく。土
砂も溜まっていますし。下捨えをして料理に
かかるのと一緒ですね。それが井手揚げです。
夏も近づくと八十八夜つてあるでしょ。その
前後は全国どここの地域でも、この井手揚げの



城原川 お茶屋北

行事が始まるわけです。その前に水道公役
(くやく)がある(注12)。水道公役にしても井
手揚げにしても、どのくらい人間が必要で、
どれだけの材料が必要なのか。その材料がね、
下流にもまだその井手がありますから。例え
ば、城原川なんかは草堰がたくさんあるでし
ょう。あの草堰は下流への配慮をして水を取
っている。いらない水はちゃんと下流にあけ
る。代表的なのは山城の国。京都の桂川で、
当時の莊園ですよ。あそこでは下流に多く
の農業用水がある。石のあいだからちゃんと
水が漏れるような仕掛けになっている。石の
間から滴る漏れ水を、下流の用水に充てるこ
と書いてある。そついつ川の中で全体を見てい
るんですね。今の人間は自分の所だけしか見
てないでしょう。

富山 実はその桂川は、世界の自然保護行政
の発祥地、といつても良いのです。自然保護
といえばヨーロッパが先輩とみんな思つてい
るけれど、実は日本が大先輩。奈良時代、朝
廷は、山の木を守れ、繁茂させよとの法律を
敷いた。これが世界最古の保安林法です。下
流の水田を洪水から守り、また水田に引く水
を確保するためです。「日本の山は米が作つ
た」といふ私の理論のゆえんですが、そんな
上流まで配慮し、さらに下流への水の量まで
気を配っている。日本のような特殊な条件下
で、水とつきあうといつことは本来そついつ
ものなのですね。いまでも井手揚げは続いて
いますか。

(10)

現在NHK教養番組チーフディ
レクター。東条内閣秘密日記、
高松宮日記の発掘紹介や、埴谷
雄高・独白「死霊」の世界』
『三鷹事件 1949年夏に何
が起きたのか』の著者。

(11)

旧暦の八月二日のことを八朔と
いっつ。

(12)

水路の従属構造物(取水・排水
施設、橋等)を整える地区の共
同作業

宮地 今もやっていてね。八十八夜の連休をつぶしてずっとやっている。

富山 手作業ですものね。農業人口が減って若い人手が足りないということはありませんか。

宮地 それは同時に暮しの水でもあるから、地区総出ですよ。二十年前くらい、栃木県でしたが、水路のトンネルの中に入ったらガスが充滿して亡くなられた方が出たという話

もありましたね。まあ、この頃は江戸時代以来

来苦心して作られた水路でも、災害復旧という名目でコンクリート化してしまって、手のかからないようになっていきますけれど、それでも形ばかりだと、蛤水道みたいな形で残っていますね。

宮地 用水路に入った水を上手に使うためには、水を思う通りコントロールしなくてはなりません。よくクリークは水路だけとお考えになる。そうではなくて、クリークというの

クリーク 水を人間の暮らしに合わせて コントロールするしくみ

いま、(有明海の)海岸堤防に立って見ると海と陸との関係がよく分かる。すぐ近くに昭和初期の堤防があり、その奥に明治の堤防が、さらにその奥に江戸時代の堤防がというふうに、堤防が幾重にも整然と伸びて、その時代時代の海岸線を示している。そして、堤防に囲まれたその干拓地は、内陸に向かうほど階段状に地面が低くなっている。江戸時代の干拓地より明治の干拓地のほうが高く、それよりも昭和の干拓地のほうが高く、それよりも泥の干潟のほうが、まだ高い。足下の堤防の内側と外側では、2メートルもの違いがある。現代の海岸堤防もまた、海の陸化を助けている。

とはいえこの風景こそは干拓地の、水のコントロールの難しさを示すものであった。干拓が先へ伸びるほど、古い土地は排水困難となる。と同時に用水源にも事欠いた。

人々は、農地のまわりの土を掘り、それを農地に盛り上げた。そのようにしてできた壕がクリークになった。クリークは雨水を引き受ける排水処理施設であり、同時にその水はかけがえのない用水源であり、水を汲み上げては、繰り返し使われた。それでも水が足りなくてアオが使われたのである。クリークはそのアオを貯め置く溜池でもあった。

当然ながらクリークは山からの川とつながり、さらに海からの潮の道、江湖と呼ばれるもう一つの水の道ともつながった。

こうして独特の水の風景が出現する。網の目状に水路を走らせ、川水と、クリークと、アオとを結んだ、一大水利システムの世界であった。

(富山和子『日本の米』より)

は、水を人間の暮らしにあわせるようにコントロールする。だから、いろいろ付属構造物と一緒にしないと、クリークにならないわけです。例えば、水門とかいろいろな施設のことですな。同じ様に、ちょっと物を見る時に、そこで暮らしている人がどんな形でこれを生かしているのか、というのを見ないと。例えば、城原川の草堰ですな。草堰の下流の人と上流の人との関係、それからそこで取った水は、Aという集落、Bという集落の水になっていきますよな。でも、ずっと用水路の下流までいくと、その水だけで足りるという保証はない。うまい具合に、あの隣に田手川っていう川があります。田手川は、城原川より筑後川の上流の方になりますから、同じ筑後川の支川でも、上流に行けば行くほど塩分の少ない水が来ます。それで田手川の城東橋のあたり(詫田江)でアオを取る。あの城東橋まで潮が上ってくるんです。そのアオの質が良い。上流になるほどね。だからそれを取って補っている。実には上からの水、下からの水、両方を上手に使いながらやっている。もっとも、筑後川本川でのアオ取水についてはトラブルはないんですが、逆に支川の上流から取っている分については、日割りだとか、時割りや、堰の構造、大きさ、材料はどのものを使うか、高さはどれくらいだとか、いろいろあります。アオについては、ちょっとらえどころのないような所がありますが、お月様を相手にすると、人間はのんびりするんですかな。

富山 それでもアオのローテーションはあるわけでしょう。

宮地 それよりも、むしろお月様相手というか、潮の満ち引きに合わせて、その時間に行つて開閉すればいい。ただし、場所によっては取水堰の付近で、マムシが出ないっていう保証はないわけだから（笑）。しかし、そういう形でいろいろ苦労していますから、お互い思いやりもあるんです。というのには、下流の方では、上流で取られると困るので、堰には水番がはりついてるんですよ。水番は眠つていないけど、ためき寝入りをしている。それで「ついつい話がある。「酒（堰）が上がる」と水は下らない」と（笑）。

それと同じ様に、自分の田んぼの田廻りをしてるでしょう。今は蛇口ですけど、人が苦労して引いている時には、それを邪魔しないという鉄則もあるんです。ずるい人は、草履（足長）を田の畔に置いてるんです。田廻りをして水を引いている証拠になるから。近頃は草履がないから、鍬を置いてる。鍬で取水堰を開けたり閉めたりするでしょう。メソボタミアあたりに行きますと、用水路（運河）のために捕虜を使うから、捕らわれた人が川のほとりで泣いたっていつけれど、あそこでは取水堰を開けるのはシャベルです。あそこには厳格な水のローテーションがありますね。

富山 そうですね。日本とはまた違った幾何

学の世界です。

宮地 それから、水路を引くでしょう。水路に細かい取水堰などいろいろありますから、その分け具合。それから水が足りないからって隣の川のね、城原川だったら田手川からアオをポンプで揚げて、それで水の足りないところを補つていうやりかたでしょう。それもアオ取水は一ヶ所だけでなく、何ヶ所からも取る。そうすると、ある地区の農民の水勘定は、それを自分の所の関係地区の人の水奉仕だけでなく、隣の集落、例えばAだBだCだという集落まで交じり合つてやってくるんです。地区の労働つていうのは、地区単位ですが、それでありながら他の地区の恩恵にも加わっている。村全体としての経費の割り当ては、自分たちの集落だけの一人あたりの計算単位と、村外の人たちの計算の単位とは違つてね。書き方は「村外経費割り当て帖」という形になっている。その計算の中で、村自体は大きな共同体で、百姓仕事だけでなく、冠婚葬祭、慶び事、憂い事、いろいろありますね。しかもそれはいつ起こるかかわからないことですから、経費は臨時的な経費という考え方でしょう。村ではこれを「臨時費割り当て帖」とか「村外抜き物取立帖」と今でも書いてる。日照りになるか洪水になるかわからないでしょう。普通の予算という形式でなく、「全部結果として、これだけかかったから徴収します」ということになっています。そういう自分たちの暮しのための経費

はね、国から取り上げられるものとは呼び方が違つたんです。共同体で互いに金を抜き合うから、これは「抜き銭」（貫物）って言つたんです。そして、税金は国から強制的に取り上げられるから、「納め物」って言つたんです。その言葉だけでも、いかに農民の世界があるかということですね。共同体が生きていなければ農民の暮しはないんですよ。

よく、村会とか議会の議員の選挙の時に、大字がいくつかの小字の単位になってますよね。今年はその字が当番だからというように、地区単位で議員の候補が出るっていう



江湖堀とダムの用水幹線（佐賀市巨勢町付近）
クレークは排水を兼ねるので、深く刻まれ低所を流れる。用水路は水源から遠い海岸地帯まで水を運ぶために高所を流れる。古代と現代の併存する佐賀平野 古代から現代に至る“水利構造物”の展示場である。

のは、そういう背景があるんです。それをただ単に古いとだけ言えるかどうかわかりません。一番悪いのは、残さなければならぬものとの区別がつかずに、バタバタと壊してしまっただけです。明治以来の日本人の悪い癖じゃないですか。つい百数十年前に始まったものが多すぎるんですよ。

結局ね、「土地と水は連続している」という思想がないとわからない。まず連続しているのは、土地がずっと横に広がっている。横の広がりと縦の径です。そうすると時間と空間を含むことになる。当然、連続も無限に広



佐賀県庁展望塔より

げていくと世界中がつながるでしょう。原始の世界にもたどりつく。グローバルな視野っていうのを持たざるをえないわけです。

伝承される農村の知恵

富山 いい話ですね。平六濁水や五三年濁水で具体的に知りたいたいことがまだまだあるので。皆さんがどんなふうにかれまでの知恵を活用なさったか。

宮地 先祖からの知恵がありますから。濁水の時には、どこそこにポンプ置けば間違いないよ。アオが取れるという場所を知っていますよ。

富山 それは子供も受け継ぎますが。

宮地 受け継ぎますね。アオ取水だけではなく。例えば一九五三（昭和二八）年の水害の時の、諸富町の話ですがね。堤防が壊れたから、パアーッと水が来ているでしょう。すると都合が良いことに筑後川は潮が引いている。「今のうちに、この堤防を打ち壊して大水を流してしまえ。そして潮が満ちる前には堤防を塞げばいい」と。

富山 そうしたカンがまだ磨かれているとしたら、すごいことですね。

宮地 工人や職人の匠の業と同じですよ。お

日さま（おてんとさま）相手の青空株式会社社長のほこりですね。

富山 筑後川は福岡市と矢部川に水を分けている。地図を見てしみじみ思っているのですが、この決して大きくない体で、何と大きな荷を背負わされているのだろうか。そしてもう一つ思うのは、それでも農業が水を使っているうちはよいのですが、都市用水が増えるようだと、筑後川は気の毒な川になる。農業が水を使うことは水を作ることだからです。

ところで宮地先生は、基本的にこのあたりは水貧乏だとおっしゃっていますね。

宮地 いやね、クリークがあるのは川が頼りないからです。水貧乏とは、「やりくり上手」ということ。収入の少ない人ほど「やりくり上手」です。そこに、いろんな知恵が出てくる。乏しい水源の川をギリギリまで使う。水源を強化し探し出す。そのための舞台装置がクリーク、溜池、井戸、筑後川本流の変形利用としてのアオ取水です。これは個人の力ではできません。そこで、溜池の共同体、クリーク共同体としての村がある。だが、個々の村だけではやっていけない。用水ごと、水系ごとに村々連合がある。

富山 アオは農業用水ではあるけれど、いろいろと生活用水でも使っわけですね。

宮地 これはね、筑後川の水では、ずっと潮

が引いて、次に潮が満ちてくる前の状態の水が一番いいのです。その水は澄みきっていますよ。潮が引いたあとは、全部淡水だから生活用水についていうと、極端に言えば、こいらは干拓地で新しい土地ですから、地下水はまずいんですよ。井戸は使えない。自然の川の水の方がいい。それが潮先（しおさき）の水なんです。

潮先の水というのは、満潮がはじまって押し上げる最初の淡水の水のことです。上がったくる直前が好きだという人もいます。保存するためには大寒の時の水がいい。

この潮先の水を毎日汲む。しかし、梅雨の時には取れないから、梅雨に備えて家々では大きな水瓶を三本くらい用意している。潮先の水を汲んで、一番家の北側のくらい納戸に醤油の瓶などと一緒に置いておく。長梅雨が続いて水が使えない時はそれを使うわけです。普段は毎日汲んできたんです。毎日汲んでくる水でも、できるだけ過機にかけたほうがいい。飲料用を使う水ですから、飲料水の飯洞礫（はんづつがめ）に木炭、砂利、砂とかでる過して使う。

富山 クリークは他の地域にもありませんね。

宮地 利根川あたりにもあったんですよ。このように平野全体がクリークというのは、中国の蘇州から杭州のあたり。クリークという言葉は、中国の上海事変でできた言葉なんです。もともと溝渠と書いてクリークという。

溝渠とか溝。土地のものは、堀（ホイ）とかいう。例えば、用水ですつと水を必要な所まで引くんですよ。すると、しょっちゅう流れているから、こういうのは流れ堀というんです。それから、今度はアオをひく堀は、もともと江湖（エゴ）（注13）から出て来ているから、これは江湖堀っていうんです。干拓地の場合は、潮抜きのための水遊びというクリークもある。海岸堤防にそって横にずっと潮抜きの水遊びができてます。それから集落を取り囲むものもある。中には自分の家を建てる時に、地上げもかねて掘った濠なんていうのもあるけど、機能的に言えばいろいろあるけれど、時代的に言えばそれぞれの技術と需要に応じて、弥生初期の海が、後背湿地（ハツ

クマーシユ）を利用した様なクリークもある。ば、その後の律令時代のクリークもあるし、荘園時代のクリークもある。昨日見たような直島の、戦乱の時代の環濠集落もある。近世の大名時代になって各地まぢまぢの開発でなく、広く見渡した、広い範囲での水のやりとりをするようになった近世のクリーク。それから、明治以降のクリークの中では、万右衛門の踏み車が電気灌漑に代わります。それで電気灌漑に都合のいいような大正時代のクリークもある。昭和になって、二十四年に土地改良法に基づいて国営事業で作られたクリーク。今の筑後川の下流の用水事業。明治以前のクリークは、明治の田区改正でだいぶ潰されている。



かつての佐賀江、城原川とクリーク
蛇行しているのが佐賀江川。左上から右に流れているのが城原川、上流に環濠集落が見える。
写真提供：宮地米蔵氏

佐賀江川枝吉水門より周辺を見る
枝吉水門は佐賀江の洪水をカットする分水水門であるが、最大のアオ取水門でもある。

(13)

現在のクリーク地帯は、かつては干満差六メートルの有明海が河川で運ばれてきた泥を押し上げ堆積した干潟であった。その際、干潟には河川からの水が流れる溝筋ができる。満潮時には海に沈み、干潮時には河川となって水を流す。これが長い年月を経て発達し、江湖と呼ばれる川筋となった。

平六湯水

富山 平六湯水と五三年湯水の話をもつちよつとつかがえますか。平六湯水の際は佐賀県はだいが苦勞したという話は聞いていますが、「どこでも皆さん苦勞をなされたんですか。」

宮地 クリークがなければもつと苦勞したでしょう。平六湯水では、やはりアオ地帯でね、アオに頼れるからと思って上流にやりすぎた所もありますね。アオが悪すぎて、二度にわたって上流の松原ダムを開放してもらったけれど、だめだった。そういう時に、「下流に届くまでまだ我慢して下さい」というのは酷ではある。水が来るのを相当待ちかねていたからね。農民心理としてそうでしょう。日割り時刻りで自分の所に水が引けない時には、農民は素朴な生活していますから、一番のこちそうは赤飯ですが、目の前に赤飯があるのに、飢え死にしないでならないという感じですよ。「赤飯枕につれ死に」(注14)という表現がありますよ。

筑後川の河口に本川と支川に挟まれた大きな中州。これは上のほうが福岡県、下が佐賀県で、福岡県側は大野島、佐賀県側は大詫間といえます。大野島に大きなポンプがあるんですが、上流から引いた方がアオは質がいいですから。その水は幹線水路下流にある佐賀県側の大詫間島の方にね。そこに微妙な問題がありました。ここに、ほら、(筑後川



河口部の地図を示しながら)これが上のほうが大野島で福岡県、ここが旧柳川領ですね。島の中でポンプはここにあるんです。ここで公団がもってきたパイプとつないだわけです。下に届いてから取るというのは、律の雑令(ざつりょう)の中でも、水を使う場合は下から先にするっていう鉄則があるんです。用水が下に届いてから、上のほうは取るって思えばいつでも取れるわけです。ですから、たとえば水のローテーションを組む場合は、まず下流に届いてから。矢部川なんか特にそうですが、半人工的支川で福岡県のクリーク地帯に水を引いているけれど、そういう時には、八十八夜までは、全部下流のクリーク地帯に水を運搬して、そのあいだ上流の花宗川

の上の方は取らないわけです。そういう意味で下流を先にするっていうのは、それでトータルとしてのバランスが取れるわけです。逆に下に十分やっているから、原則としては八十八夜過ぎたら下流には流さない。そうは言っても適当に雨が降ってきたりするもんですが、平六の湯水の場合は、下釜・松原ダムを開放しないと、アオの水質が悪くて取れなかった。一九七八(昭和五三)年の時には、まだうまくいったけれど、平六の時には、一番下流の大詫間はだめでしたね。

富山 平六湯水の際は福岡との関係は何もなかったわけでしょう。筑後川水系の中で農民どうしの間で苦勞なされた。ところで、佐賀

(14) 佐賀地方の方言で飢え死にすることを「かつれ死に」といふ。

のもっと山側でヨスミガエがあったという話を聞きました。「もつうち」の田んぼは枯らす。我慢します。おたくは共倒れにならないように」。

宮地 蛤水道の話ですね。あそこはもともと厳格な水のローテーションがあるんです。近世に成富兵庫(注15)が蛤水道を造った時から。自分の水田が助かるか助からないか、ある程度まで日照りが進行すればわかりますから。それで、その時の割り当てで、その年の自分の耕作を放棄する。そのかわり、その後の補償措置はいろいろ考えていますよね。

補償という考え方というのは共同体ではじめてあるわけですよ。つまりその人の受ける特別の犠牲をみんなでカバーする。そういう時に、「俺はいらん」というけれども、みんな面倒をみてくれということなんです。

たとえばダムを造る、道路を造る。その金をなせ税金から補償しなくちゃならないかと言つ人は、自分たちが国全体の共同社会の構成員だという意識が低いということですよ。それが個々にちゃんと共同体があつて、はじめてそういう「今回、俺は水はいらないよ」といった耕作放棄が生まれる。すると、周りを見て見ぬふりはできないから、後のことは我々で考えさせてくれという。持ちつ持たれつという関係なんです。

富山 「水によって結ばれているんだ」という点が、水社会の一番の本質ですね。

宮地 それが地域の中に生きていて、こういう状況になつたらこれを犠牲にせざるを得ないぞ、という感覚が受け継がれるわけです。

富山 洪水や濁水の時にも、それが生きるわけですね。

宮地 そう、どこの田がどうかということ。みんなは知っていますから。昭和一四年の濁水の時には、「こんなに水が足りないならどこそこの田んぼは水の集まりやすい場所だから溜池に提供した」という所もありました。

富山 ただ、それが開港の歴史とともに、ほとんど失われていっているでしょう。ここではまだかなり生きていますが。

宮地 まずね、電気灌溉って蛇口ひねれば一軒一軒流れるでしょう。あれで送水して、それに合わせて田植えをする。ところが、隣の田んぼに水が入っているのに、俺の所は水のいらぬ畑を作るとか、例えば、水田やめてハウスをやるんだというわけにいかないんです。だから、私の友人の酒屋が養焼酎を造っていますけれど、天然の養だけでは足りないので、水田に養を養殖してもらおうとするのと、まわりの田圃は養を植えているので、水を入れたら困ると言われた。そういうことがあつて、自然に耕作の手段が自ずから縛られるってこういうこともある。いろんな形で共同体というのは……。

富山 近代化されていくと、どんどん崩れていく。

宮地 今まで農水省は汎用農地と言っているでしょう。つまり何にでも使える、水田でも畑でもどちらにも使える農地。ところが、ハウスというのも年中水がいらぬかというところ、ある程度の水は必要です。しかも必要な時は四六時中でしょう。それから、国営の幹線水路をはじめ、県の水路の水位を、今のこの時期で下げられない。いい水質を保つためには、溜池でも年に一度は乾かさなくてはいけませんし、水路にしても、時々乾かして、根っこから浚えないといけない。水路や溜池の底を空気に触れさせないと、水質が保てない。そういう維持管理の問題がいろいろあるわけです。さらに灌溉に使つた電気は、地区ごとの計算で電気代いくらだったかとか考えましょう。どこまでいっても農業ってというのは、そういう共同体のつながりがまとわりついてくるわけです。

農業に関わらず、どこの世界でも複雑な複合文化から成り立っているわけです。ですからこのクリーク地帯の特徴はね、みんなが村の役割をずっと順番にやっていますよね。固定的にある特定の家があるということではなくて、平均化され平等化されている。庄屋、区長、みんな廻り持ち。世襲ではない。これがクリークの特徴なわけです。



(15) 成富兵庫茂安 一五六〇〜一六三四(永禄三)寛永一。龍造寺隆信、鍋島直茂・勝重に仕えた武将。蛤水道をはじめ、藩内の河川改修、ため池築造など治水事業に大きな功績を挙げたことで知られている。

アオの文化博物館を

対談を終えて

富山和子



城原川の草堰

筑後川は私の大好きな川です。日本中の川を歩いて来た私ですが、これほど思い入れを込め、丹念に、繰り返し繰り返し書いてきた川も他にありません。日本の川というものをこの川に代表させて書いたのが『水の文化史』でした。その後も部分的にですが、『日本再発見 水の旅』に、また『日本の米』のお米は生きている^(注16)に。

筑後川は収斂する川です。利根川のように、下流は広がってどこかへいってしまえば、とらえどころのない川とは違います。この川で使った水は必ずこの川に戻り、そういう分かりやすい川なのです。ですから、いま行われているように、水系を越えて福岡市にまで水をあげるといふことは、川の本分を越えさせた、実は異常で大変なことなのです。川の個性を壊してしまう大手術、といっても良い。福岡市民は、どこまでその認識を持っているか。その収斂する川の中で、筑後川の人たちは、上流も中流も下流も、よってたかって水を作ってきた。筑後川が魅力的な理由がそこにあ

ります。上流が森林を作り、水を作る。中流がその水を水田に引いて、水田はダムですから、また水を作る。そして下流ではその水が海へ行ってしまうと、それをまた引き上げて陸地に止める。これがアオでした。

土についても同じです。よってたかって土づくりをしている。上流の森林が土を作る。洪水がそれを海へ運ぶ。それを海が陸地に返してくれる。それをキャッチして陸地に止めていく。これが干拓でした。上流が土を作る。下流がそれを受け止めるという、これまでの日本列島の国土作りの図式の、その典型的な姿をしているのが筑後川だったのです。

いま、上流では林業が衰退して、森林が歴史始まって以来の危機に直面しています。農業も危うく、加えてアオの文化がなくなろうとしています。心細い限りです。せめてアオ取水の技術くらいは、映像や活字ではなく模型などを使って、可能な限り文化遺産として残すことが出来ないか。アオの文化博物館を提案して、終わりたいと思います。



(16) 富山和子『お米は生きている』講談社 1995年